

てんかんリハビリテーション

ジョージ N. ライト 編著

秋元波留夫・大沼悌一 監訳

国立武蔵療養所てんかん研究会 訳

「400万に及ぶてんかんアメリカ市民とその家族が発作という古くからの重荷と、自助・独立に対する社会的経済的制約という重荷とにあえいでおり、……てんかんに対する正しい知識は、その重荷からこれらの人々を解き放つのに役立つにちがいない」という確信のもとに、米国中のてんかんリハビリテーションにかかわる科学者や研究の実践家の研究成果を集めて、米国リハビリテーション・リサーチの第一人者であるウィスコンシン大学のG. N. ライト教授が体系化したのが本書である。

内容は、てんかんリハビリテーションの理念、医学的知識、法的権利擁護、心理社会的側面、評価、カウンセリング、職業リハビリテーションの立案とカウンセリング、職業紹介と就職後の定着指導、行政・公的援助網の実態、民間活動の実践等、広範に亘る。「総合的リハビリテーションはてんかんをもつ人と、協力する多面的チームワークが必要」といわれる通り、リハビリテーションの流れにそって包括的に、かつ各専門分野の機能を明解に位置づけて実証的に記述している。

情報が新しく、実証的で高い専門性を持ち、科学的実践に基づいているために切実で、アイデアに富む。どの章をいかなる専門分野の人がみ

ても、興味深く、魅力的なことだろう。すべて執筆した専門家たちが、てんかんをもつ人間と、人間同志としての共感に結ばれ、じっと一個の人間の苦悩と福祉とを異なった援助手段を通じて凝視しているからだろうか。

この大著が、障害の概念を、身体障害のみならず精神薄弱や精神障害、その他にまで拡大してとらえて、その福祉を実現していこうとする国際障害者年直前に、てんかん者の社会統合への責任性に目醒めたわが国の第一線の医師たちの協力で訳出されたことは時宜を得たことである。とかく、一般人の理解からほど遠い所で苦悩を一身にかかえ込んで来たわが国のてんかん者とその周囲の人々の将来に「一つの希望の燈」がともされ始めたように思われ、ブレ国際障害者年にあっては、より意義深いものを感じる。

訳もよくこなれていて読みやすい。普通の翻訳家に苦手の病状記述、薬品名、症例研究等、さすが医師たちの業とあって実に正確であざやかだ。その上アメリカの薬品名は日本の薬品名におきかえられ、所々に注をつけるなど親切である。用語統一にも神経が使われている。

ただ一つの問題を指摘させていただくならば人名がすべて丁寧にカタ

日本女子大学文学部社会福祉学科

小 島 蓉 子

カナで述べられてはいるが、時に別なサウンドに転化していることである。つまりリーゲルスがイーグルス、ミュータードがマサードなど、ご当人の教授らには通じないかも知れない。また文中の(著者名、年度)の標記は、文筋の由来の文献との照合符であるから、英文名をそのままにしておいた方が、オリジナルをたずねる研究者には親切だったかも知れない。

ともあれ、要は内容の豊かさ。この本を読めば、監訳者も云うように、米国政府のてんかんリハビリテーションへのとりくみの積極性と、研究者たちの真摯でヒューマンな努力に多くを教えられることは確かである。

そして「空白に近いてんかんリハビリテーション」の充実にとり組まねばならないわが国、関係者の責任性を刺激せずには置かない。本書の中にみなぎっている米国てんかんリハビリテーション開拓の実証は、これから真空地帯に挑戦するわが国の医師、セラピスト、ソーシャルワーカー、職業カウンセラーや雇用担当官たちへの有力なガイドラインとなるに違いない。

(A 5, 338頁, ¥3,000, 1980年
創造出版 刊)